日本
ハンザキ研究所ニュース　2007(5):通巻１６号
発　行　　２００７．０５．３１
〒679-3341兵庫県朝来市生野町黒川 292
TEL/FAX (079)679-2939
日本ハンザキ研究所　　栃本　武良

ヤマセミの死体を見つけてしまった！！！

ハンザキ研ニュース№3(2006.4)でハン研のある谷間を縄張りにしているヤマセミのペアの話を書きました。昨年の４月以降は毎日のようにその姿や鳴き声を見・聞きしていたのです。昨年の12月から始まった河川観察施設の工事期間中は重機が騒音をまき散らしていたので、しばらくの間は鳴き声を聞くことが出来ませんでした。３月に工事が終わるとすぐに、ヤマセミの声が聞こえてくるようになりました。しかし、鳴き声も姿を見かけるのも１羽だけだったのです。気になっていたのですが、別行動もあるのかもしれないなとも思っていました。

黒川地域には日吉神社が本村（ハンザキ研から北に３㌔）と梅ケ畑（同　北東2.5㌔）という近距離に２社もあるのです。梅ケ畑集落は市川水系長野川支流梅ケ畑川沿いにありますが、長野川に合流する地点に当神社があります。社殿は急な階段を 100段以上登った所にあって、倉庫の雨戸はムササビの開けた孔が沢山あります。また、川沿いの道路の横の水溜たまりではヒキガエルが産卵しています。自転車で時々観察に行くのですが、道路脇の笹藪でヤマセミの死体を見つけたのです。ああ、やっぱりペアの一方が死亡していたのでハンザキ研周辺では１羽しか見ることが無かったのだと、残念でショックな出来事でした。

死体はかなり痛んでおり、腐肉食の昆虫が多数出入りしていました。腐敗臭もしていましたが、貴重なサンプルとして持ちかえりました。どのような昆虫たちが群がっていたのかは後日に専門家に依頼することにします。ハンザキ研へ国道から渡るハンザキ橋の下を水面近くカワセミのペアが飛び、上空をヤマセミのペアが私の姿に警戒の叫びをあげて飛び去っていました。しかし、今では一羽のみが遠くから警戒音を発しては姿を消してしまいます。犬や小鳥、魚類など多くのペットの死を目にし、水族館の飼育係としても無数の水族たちを死なせてきました。生き物にとっては人間も含めて死は切り離す事の出来ない現実ですが、それでも人けのないハンザキ研での生活の中で、大いに反応してくれていたヤマセミのペアだったので、新しい相棒が早く見つかることを願っているところです。それにしても昨年は次世代が育ったのかも気になるところです。

オオサンショウウオ“安口ルート”を求めて（6）— アンコウ、アンコ他

NPO 法人 地域再生研究センター会員
日本ハンザキ研究所 研究員　池 上 優 一

小野蘭山(1802)「重修本草綱目啓蒙(本草綱目啓蒙)」に出てくる地方名の一つにアンコウがあることは前に述べましたが、今回はこのアンコウなどについて触れます。とは言うものの、このアンコウの謂れが最も判らない呼び名なのです。

現在、アンコウと言えば、アンコウ鍋にする海魚しか思いつかない方がほとんどであると思いますが、元は奈良～平安期の仏教・経典などの伝来、その後の大陸との往来により我が国に仏教が広まる過程で、僧侶を示す「安居(あんこ)」という言葉が、オオサンショウウオに対する呼び名「鮟鱇(アンコウ)」の発祥であるとされています。

そのことに具体的に触れている文献には、山田俊雄「漢語研究上の一問題　-鮟鱇をめぐって-」(「国語と国文学」1953)及び、虫明吉治郎「ハンザキ・鮟鱇の語誌ー大山椒魚という動物の呼び名を考えるー」(「日本方言研究会」第 53 回研究発表会　1991)があります。それらの内容については後程、紹介したいと思います。

ところで、この鮟鱇という文字が、日本の古典の中で最初に出てくるのは室町初期の節用集(国語辞書や百科辞典の類)の中で、鮟鱇の文字で読みが「アンカウ」として、「有足魚也心気ノ薬之」と説明が付いています。その後、江戸初期にかけて、節用集の新刊や写本の多くに、「アンカウ、アンコウ、アンガウ」などの読み、「鮟鱇、鮟鱇、暗向」などの文字、「心気の薬、有足魚也」などの説明がついているものが多くあります。

ところが、貝原益軒(1709)「大和本草」に、文字が「華臍魚」でアンカウと読む魚が示されていることは以前触れましたが、これは、老婆魚とか琵琶魚とも言われ、現代に言う「海のアンコウ」のことを示しています。この解説として、「国俗に鮟鱇と称すが出処が不明」とあり、この時代には、「鮟鱇」は「華臍魚」を指す言葉に変わってきています。この本の中では、泥鰌(ドヂャウ)、鮠魚(ニンギョ)、鯢魚(サンセウウオ)、鰻鱺(ウナギ)なども解説付きで記載されています。

この少し前、益軒の甥にあたる貝原好古(1694)「和爾雅(わじが)」で、はじめて「華臍魚」がアンカウとして紹介されており、鰻鱺魚(ウナギ)、鰌(ドヂャウ)、鮠魚(ニンギョ)、鯢魚(サンセウウオ)も簡単な解説付きで示されています。二人は、かなりの部分で情報を共有していたものと推測されます。

つまり、それ以前の室町初期から江戸初期頃までは、海のアンコウは琵琶魚とか老婆魚と呼ばれていた一方で、鮟鱇(アンカウ)は、足があり心気の薬になる生き物で、これがオオサンショウウオのことを言っていたらしいのです。

その辺の経緯について、前述した最近の国文学や方言学の分野での研究資料から、引用してみたいと思います。まず、山田俊雄「漢語研究上の一問題　-鮟鱇をめぐって-」(「国語と国文学」1953)から見ます。

氏は、日葡辞書や、鮟鱇を有足魚などと解説している節用集などを挙げ、「・・・断言してよいであらう、室町中期以後元禄以前に、「鮟鱇」が有足の川魚即ち今日いはゆる山椒魚の一種ハンザキの如きものをあらはしていたことがあると。・・・さて、これ

らの辞書でみると室町後期の鮟鱇がハンザキのごときを指すとして、同期では海産のものを明らかに指した例は存しないのである。海産のものたることを證しているのは、吊るし切りとむすびついた用法のもののみである。前にあげた「本朝食鑑」は、明らかに「吊切」の事を述べている。・・・次に現代方言についてみると、全国方言辞典と、筆者の採集によると、山椒魚をアンコ又はアンコオと称する地方が、京都府北部・愛知・長野及び兵庫佐用郡などにある。又、山椒魚と動物学上分類の綱を同じくする両生類のものにも、この称がある。・・・古辞書でみえる短い期間だけは「鮟鱇」が山椒魚であり、後には専ら、海のものに鮟鱇が固定したものであろう。・・・ただ、ここで七巻本世俗字類抄にこの「鮟鱇」の字面が見えていることを報告せねばならぬ。したがって「鮟鱇」の字面の成立の時期は室町期より更に遡りうるかとも見えるが・・・」とあります。

次に、虫明吉治郎「ハンザキ・鮟鱇の語誌ー大山椒魚という動物の呼び名を考えるー」(「日本方言研究会」第53回研究発表会　1991）の中から紹介します。

この中の『3、「鮟鱇」(山魚、海魚)について』で、次のように述べています(ただし、氏はオオサンショウウオを山魚、海のアンコウを海魚と仮称しています)。

「従来、「鮟鱇」は語源が不明だと言われ、また、和製漢語と考えられたふしもある。が、実は「鮟鱇」の語源は中国漢語(仏教語)の「安居(アンコ、アンゴ)」と考えられる。現在、主として中国山脈の東部に分布する、山魚の呼び名アンコ(—)は、山魚の中世名「鮟鱇(アンカウ、アンガウ、アンコウ)」の残存である。夜行性で、昼間は水中の洞穴に蟄居する山魚の姿勢は、仏法におけるきびしい修行の安居(アンコ、アンゴー)の僧の姿態に類似する。山魚はその雰囲気が安居(アンコ、アンゴ)の僧に類似することから<安居の僧のような魚>ということで《恐らく「安居魚(アンコウオ、アンゴウオ)」という過程を経て》「アンコー、アンゴー」と呼ばれるようになったと推定する。これには勿論、中世に入って新仏教が流行し、広く地方化し、庶民化したという時代の背景があったのである。・・・」

さらに氏は『「鮟鱇(山魚)」から「鮟鱇(海魚)へ」』という項目で、次のようにまとめています。

「恐らく、山魚名の「アンコー、アンゴー」の成立より、遅れたろうであろうが、海底に鎮座する、例の大口の海魚についても、「安居(アンコ、アンゴ)」から「アンコー、アンゴー」の呼び名が、山魚とは全く別個に成立したと思われる。最初、この海魚の「アンコー、アンゴー」には、中国の沿岸で使われている「華臍魚」という漢字が当てられていた。後に、山魚の「鮟鱇」という漢字表記が、消費量の多い海魚の「アンコー、アンゴー」に移り、「華臍魚」という漢字表記は海魚から消えた。一方、山魚のほうも、「山椒魚(山椒のような魚)」という呼び名が盛んになってきたこともあって、「鮟鱇」という文字も呼び名も中央から消えた。」というものです。

安居には、多少見下げたようなニュアンスもあり、人にも使われてきたことも上記の両文献に述べられているのですが、その部分については触れないで直接的に関係する部分のみを拾い出して紹介しました。

現在、日本ハンザキ研究所のある生野でもアンコウと呼ばれているオオサンショウウオ、あんこう鍋として食べられているアンコウ、この両生類と魚類はイメージが大変類似していることにも大いに関係していると思われます。おそらく、江戸期には一時混同されていたことも考えられ、何となく面白さも感じられます。　　(続く)

モリアオガエルの繁殖シーズンが来ました

昨年の大産卵場となった校内の池の周囲に目隠しをセットしてみた。覗き穴も付けて、うまく行けば産卵観察会を実施したいと思っている。昨年は５月中旬に産卵が始まり、20日には一夜で10卵塊以上が産みつけられていた。しかし、今年は暖冬と言われ時期が早まるかと思っていたら、昨年同様に10日過ぎから産卵が始まったものの、５月半ばに急に冷え込んで21日には２℃という夜間の最低気温を示す状況で、ラブコールも一時休止となった。10～20日の間に約10卵塊が産みつけられたが、全て池の周辺の地面近くの草に産みつけられており、すぐに食害にあってしまった。池の上に枝を張り出す樹木が少ないためもあるが、やはり樹上のほうが安全度が高いのだと思う。

一方で、地域の方から田んぼに水を張ると水面に白い卵の塊が浮いてくるとの情報を頂いた。現場を案内してもらうとシュレーゲルアオガエルの卵塊が風に吹き寄せられて田の片隅に沢山集まっている。田植えに先立って掘り返された田の土中から出てきた塊が、水を張った水田に浮いてくるということだ。これでは、子孫を残せないのではないかと心配していたら、10日ほどたってオンブ・シュレーゲル２ペアが運び込まれた。まだ、産卵が続いているのだなと安心したが、翌朝に水槽のなかで片方のペアが産卵しオンブも解消されていた。11日に鋤返され水面に浮いていた卵塊を収容したが、26日にオタマジャクシが多数孵化してきた。あのまま水田の水に浮いていても孵化したのだろうか？

25日は一日雨だった。気温も上がって絶好のモリアオ産卵状況だ。池の照明もOKで、カエルの方も気にせずにラブコールに専念している。午前４時に覗くとフジの絡まった樹上でカエルがうごめいていた。撮影したがフラッシュにも反応はなかった。午後になって卵塊を間近に見たが直径30㌢程もある大きな塊で、一体何匹のメスによる産卵なのか分からない状態であった。その一方で、池の底にはオス・メス各１匹の死体が沈んでいた。

・・

オオサンショウウオの会in三重　10月７～８日に開催

第４回目の会合が赤目四十八滝で知られる三重県で開催されることになった。分布の中心である中国山地の他に岐阜の郡上や大分の院内と共に離れた場所にもかかわらず、多数のオオサンショウウオが生息することが知られている地である。日本サンショウウオセンターもあり、滝川における本種への対策工事が実施されたフィールドも有る。また、水資源機構川上ダム建設所が保護池を作り、産卵観察プールでは数年前から孵化が確認されている。このダム建設周辺では、多数の本種の生息が確認されていて、これらの個体を工事期間中にどう扱うのかが注目されている。

ハンザキ祭り（８月７・８日）で知られている岡山県真庭市湯原町では、祭りに合わせてオオサンショウウオ・フォーラムが計画されていると言う。

写真２　水田に浮いていたシュレーゲル・アオガエルの卵塊

写真１　ヤマセミの死体

写真３　キイロスズメバチの巣と越冬していた個体

写真４　出石川産63㎜の大きな昨年生まれの幼生（上）と
ハンザキ研で孵化させ飼育中の幼生（10個体平均全長46㎜）

写真５　海から揚がったアンコウ(鮟鱇)
（「魚市場ネットフーク」ホームページより）

写真６　一時鮟鱇の呼び名を奪っていたオオサンショウウオ
（「海の鮟鱇に何か似ていて妙」と思いませんか？）

ハンザキ研日誌　2007年5月

１日：調査（GS-237）～22日まで
２日：集英社（週刊プレイボーイ）ツチノコ・ハンザキの取材に東京から
３日：河川観察施設にテント張りテスト（産卵期の観察に向けて）
４日：連休でオートバイのツーリングとか銀ギラギンの騒音まきちらしオンパレード
５日：豊岡市教委の但馬国府・国分寺館の加賀見館長来所。オオサンショウウオ展で
６日：G．ウイーク最終日は雨で静かな一日であった
７日：２月にサンプリングしたキイロスズメバチの巣から生きている蜂が出てきた
１０日：ハンザキ研の川向こうの崖の落石防止工事開始、折角の雑木を見事にすそ刈り
１１日：朝７時過ぎに本村の水田からの落水部にオオサンショウウオが２個体いると連絡あり、採捕測定す。水張りされた水田にシュレーゲルアオガエルの卵塊多数
：校内の池でモリアオガエル初産
：ヤマセミの死体収容
１２日：日本工科専門学校・中農理事長と田中都市工学科長、学生７名来所、今年度から、ハンザキ研で生態学とビオトープの授業を実施することになった
実習中にオオサンショウウオの昨年生まれの幼生と78ギの成体を発見する
１７日：関西電力・姫路電力所長、奥多々良木発電所長他視察に来所
：出石川で昨年生まれの幼生１保護される。キタイ設計の柿木氏搬入、全長が63ミリと大きな個体であった。人工巣穴産のオオサンショウウオ幼生10個体測定（平均全長46ミリ）アンコ淵産の１個体は全長58ミリであった。
１９日：サンTV夜間調査取材、25日はハンザキ研の取材、放映は 5月31日
２２日：今回の調査終了,22 日間の滞在
２５日：調査（GS-238）～６月？日まで
２６日：ステーションの人工巣穴の蓋を半分にカットなどの手直し

今月は２回２９日間の出勤？で，来訪者を含めて総計１２４人の利用がありました。
2005年８月の開所以来では５４回３０３日，総計１，６００人になります。

・・

ハンザキ所長のツブヤ記録

先月は３月30日から28日間、今月は23・24日が姫路で合計29日間の滞在となった。25日からは６月へかけて続けて滞在予定である。下界での野暮用が無ければ、この天国のようなハンザキ研に住み着きたいと思っている。ただし、食生活の向上を計らねば長続きはできない。仕事をしているとあっと言う間に食事の時間になっている。できるだけ規則的にと考えて６・12・18時と３食を取るようにしているが、まずはとりあえずビールということになり、主食の感がある。アルコール燃料で走る環境優良車（者）でもある？・・・